首里城京の内跡出土品展

国指定重要文化財公開

目　次

ごあいさつ 1
世界に数点しかない逸品 2
洪水のようにやってきた大量の青磁 4
陶磁器の精髄　青と白の芸術　青花 8
アジア諸国との貿易を示すもの 12
コンテナとしての容器 14
様々な金工品 16
重要文化財指定基準・重要文化財指定の名称と指定理由 20
重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧 21
京の内関連年表 22
関連行事のご案内 24

【凡　例】

1. 本書は、国指定重要文化財公開首里城京の内跡出土品展（開催期間 2012［平成 24］年 11 月 3 日から 2013 年［平成 25］5 月 5 日）を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 当該企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催し、開催する。
3. 許可無く本書の複製および転載、複写を禁ずる。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本書に記載されている資料名が一部異なるものが存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。

ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」518点を所蔵しておりますが、これらは平成６（1994）～９年度（1997）までの４年間実施された首里城京の内跡発掘調査において、倉庫跡（1459年火災で焼失）を調査した際に出土したものです。

これらの資料を詳細に調べた結果、14世紀中頃～15世紀中頃に中国、東南アジア、日本などで生産されたもので、なかでも「元青花八宝文大合子（げんせいかはっぽうもんおおごうす）」や「紅釉水注（こうゆうすいちゅう）」などは、世界でも例のない貴重な資料であることがわかり、わが国の歴史上、意義深く、かつ学術的価値の高いものとして平成12年６月27日付けで国の重要文化財（考古資料の部）に指定されました。

この貴重な品々は、中国との進貢貿易や朝鮮・日本・東南アジア諸国との交易によって琉球王国にもたらされ、琉球国王即位式などの王家の特別な儀礼や祭祀、あるいは中国から来琉した冊封使を歓待する宴に供されたと思われます。

今回の企画展では、これら京の内資料を６つのテーマごとに分類し、それぞれの資料から見える歴史的な背景にアプローチしていきます。また、一度だけでなく、何度も展示会に足を運んでいただき、じっくり楽しんでいただけるよう、開催期間を二週間から六ヶ月へ大幅に延長いたしました。

この機会に、多くのみなさまにこの展示会を鑑賞いただき、郷土の文化財の魅力や価値について理解を深めていただければ幸いです。

平成２４年１１月３日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　崎　濱　文　秀

世界に数点しかない逸品

京の内跡出土品の特徴のひとつに、「逸品」ともいえる資料の存在が挙げられます。その代表例としてよく紹介される製品が中国産紅釉の水注です。この水注は仙盞瓶と呼ばれる独特の形態をしており、現時点でも世界に数例しか確認されていません。京の内跡出土品にはこれと同じ器形の中国産瑠璃釉水注が出土していることから、双方とも赤と青の対で使用した特殊な用途の器物と考えられます。また中国産青花においても大合子や高足杯といった「逸品」がみられます。大合子は同じ形状の類例が今のところ未確認であり、世界的にも希少な資料です。高足杯は中国での出土例は知られていますが、日本及び沖縄では初めて報告された製品です。これらはいずれも通常の交易活動で入手できる量産品とは考え難く、往時の琉球による朝貢貿易でもたらされた限定品と思われます。

この他、ベトナム産の青花にも上記のような製品がみられます。花唐草文面取瓶は外面胴部に複数の窓枠を設け、その上に透かし彫りの花文を張り付けていますが、花文の一部には漆で装飾されたような痕跡が残っています。また龍や鳳凰をかたどった型物の水注もあり、いずれも東南アジア海域の沈没船引揚品や博物館の伝世品などでは確認されていますが、日本国内では初めて出土した極めて珍しい資料です。これらも琉球と東南アジア地域との中継貿易で運ばれた「逸品」といえるでしょう。

上段左：中国産紅釉水注　　上段右：ベトナム青花 花唐草文面取瓶

下段左４点：中国産瑠璃釉水注　　下段２点：ベトナム産型物（龍形？）

青花龍文高足杯

青花八宝文大合子

青磁 牡丹唐草文瓶

青花松梅樹文双耳花瓶

洪水のようにやってきた大量の青磁

京の内跡出土品で最も多いものは青磁で、重要文化財とされた518点のうち、289点を数え、全体の6割を占めます。京の内跡及び他地区を含めた首里城跡の全体の調査で青磁の出土は13,000個体以上を数え、県内で最も多く出土しています。これらは京の内出土青磁も含めて、その多くは14～15世紀に中国浙江省（せっこうしょう）の龍泉窯周辺で生産されたものです。この時期の特徴として、日本各地の遺跡から出土する陶磁器の量は減少する傾向にありますが、琉球では多く出土しています。このことは、文献に記載されている朝貢貿易の内容を示しており、当時の琉球が中国との直接的な交流を行っていたことを表すものと言えます。

青磁を出土別でみると、碗・皿が8割、盤が1割、その他1割といった内容です。碗には現在のラーメン鉢でも見られる、雷文（らいもん）が飾られているのが特徴的で、同様の大鉢まであります。皿は口径10cm前後の小皿が多く、直口・口折・腰折・八角などの形があり、前後の時代と比べると非常にバラエティーあふれたものです。また盤は、琉球では本州よりも多く出土することが特徴です。もしかすると、今の中華料理のようにおかずを大皿(盤)に盛って、小皿や碗に取り分けるような食事風景であったのかもしれません。

様々な大きさの器に飾られた雷文

鉢

口径 26.8 ～ 30.6 cm　器高 12.3 ～ 13.9 cm　底径 10.2 cm

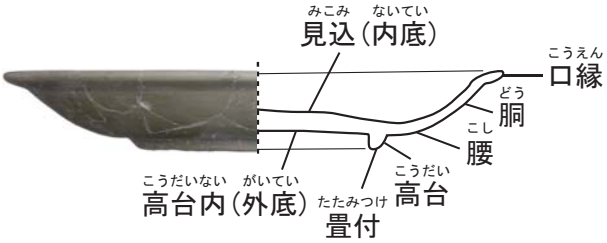
碗

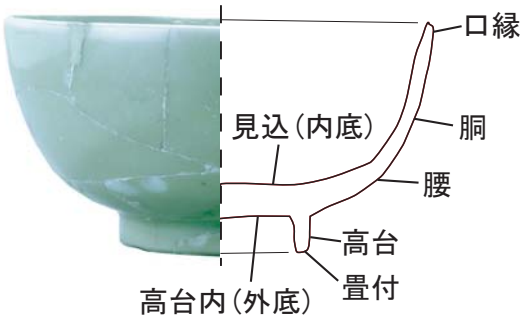
口径 17.4 cm　器高 9.2 cm　底径 6.6 cm

碗

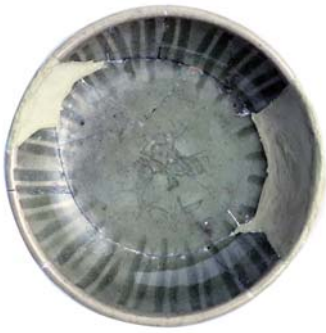
口径 12.4 cm　器高 6.6 cm　底径 5.7 cm

各部名称



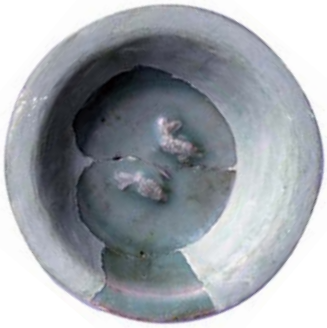


直口皿



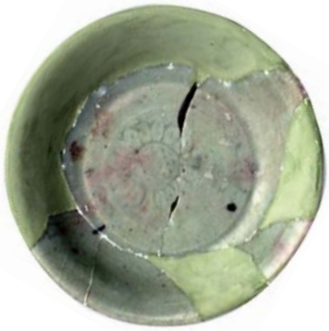
口径 11.3 cm　器高 3.4 cm　底径 6.1 cm

口折皿



口径 12.4 cm　器高 3.9 cm　底径 5.8 cm

玉縁皿



口径 11.8 cm　器高 3.4 cm　底径 5.8 cm

腰折皿

口径 11 cm　器高 3 cm　底径 5.2 cm

八角皿

口径 14.0 cm　器高 3.3 cm　底径 7.7 cm

盤

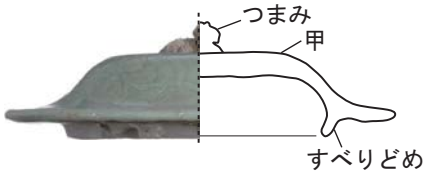
口径 33.2 cm　器高 6.6 cm　底径 15.4 cm

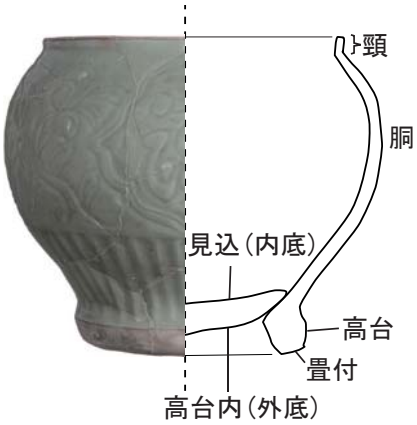
瓶

牡丹唐草文瓶
口径 26.7 cm　器高 62.7 cm　底径 14.6 cm

双耳瓶
口径 10.6 cm　器高 26.4 cm　底径 10.2 cm

酒会壺





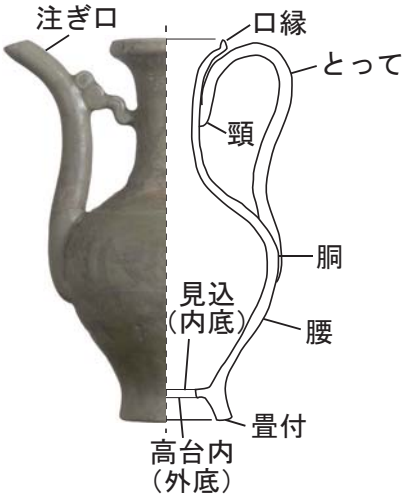
吉祥字文壺

口径 25.5 cm　器高 26.3 cm　底径 19.0 cm

蓮弁文壺

口径 24.0 cm　器高 23.3 cm　底径 19.8 cm

水注



牡丹唐草文水注

口径 6.4 cm　器高 23.6 cm　底径 6.8 cm

杯

無文高足杯

口径 8.3 cm　器高 9.4 cm　底径 3.6 cm

陶磁器の精髄　青と白の芸術　青花

青花とは中国の元代に誕生した技術で、素焼きした白磁の素地に呉須（ごす）で文様を描き、その上から透明釉を施釉後に本焼成を行うことで完成します。この製品は周辺諸国での人気も高かったようで、中国は明代より輸出陶磁器の主力を青磁から青花に移行させていきます。また、東アジア諸国も中国に触発されたかのように、ベトナムでは14世紀後半、朝鮮では15世紀中葉から本格的に青花を生産するようになります。いずれも中国元代の青花の模倣からスタートしますが、それぞれ独特の製品を完成させます。ちなみに、日本では少し遅れて1610年代に肥前（現在の佐賀県有田）で青花を含む磁器焼成が始まりますが、上記２国とは違い朝鮮系の技術を用いて中国風の製品をつくるという点に特徴がみられます。

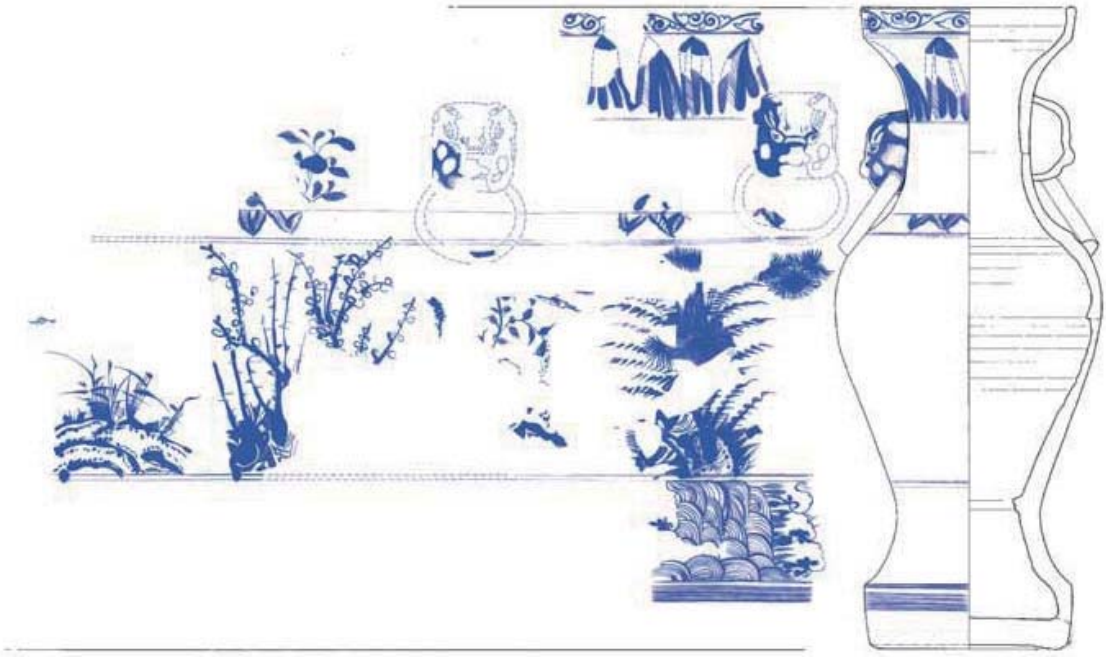
琉球は大交易時代とも称された当時、自国で青花をはじめとする陶磁器生産を行わず全て輸入に依存していましたが、青花が本格的に生産・輸出されるようになっても青磁を多く輸入する姿勢を変えませんでした。もちろん青花も元様式と称される特徴的な製品をはじめ、碗・皿といった供膳具（きょうぜんぐ）から壺・瓶などの奢侈品（しゃしひん）まで多様な器物がもたらされていますが、やはり青磁と比べると非常に少ないことが京の内跡出土品の数量にも表れています。京の内跡出土品の青花からは、当時の琉球に運ばれた青花のバリエーションだけでなく、琉球における青磁の需要が依然として高かったことが理解できます。

元青花八宝文大合子

口径 30.4 cm　器高 18.3 cm　底径 22.2 cm

元青花龍文高足杯

口径 14.2 cm　器高 11.8 cm　底径 4.7 cm



明青花松梅樹文双耳花瓶

口径 14.0 cm　器高 41.4 cm　底径 12.8 cm

明青花牡丹唐草文梅瓶

口径 5.5 cm　器高 35.2 cm　底径 12.3 cm

明青花牡丹唐草文梅瓶蓋

口径 9.0 cm　器高 8.4 cm

明青花牡丹唐草文梅瓶

口径 5.5 cm　器高 35.9 cm　底径 11.8 cm

明青花牡丹唐草文梅瓶蓋

口径 9.1 cm　器高 8.4 cm

明青花牡丹唐草文壺・蓋

壺：口径 22.6 cm　器高 37.3 cm　底径 20.9 cm　　蓋：縁直径 26.0 cm　器高 6.6 cm　内側直径 17.4 cm

明青花水草文碗

口径 13 cm　器高 6.1 cm　底径 4.8 cm

明青花麒麟文皿

口径 20.8 cm　器高 4.8 cm　底径 12.2 cm

明青花壺

口径 6.8 cm　器高 10.8 cm　底径 6.2 cm

明青花雲堂手文瓶

底径 8.6 cm

アジア諸国と貿易を示すもの

京の内跡出土品を産地別に見ると、中国産陶磁器が圧倒的に豊富ですが、その他タイ産・ベトナム産そして日本産のものがあります。タイ産は、大型の壺が大半で、貯蔵容器としての用途が考えられます。

日本産には備前陶器の擂鉢（すりばち）・壺・甕（かめ）がありますが、その量は多くありません。ただ、擂鉢は、近隣の天界寺跡や今帰仁城跡などの寺院やグスクに限らず集落跡でも出土しており、沖縄本島には一定量見られたものと思われます。日本との交流を示す好資料のひとつです。他にもその背景を表す資料として、主に九州産と考えられる瓦質土器があり、首里城跡の他地区で出土しています。その種類には火鉢や、湯沸しに使われる風炉（ふうろ）などがあります。これらは日本本土では主に寺院や城館などで出土する茶道具の一つですが、琉球にも茶道が伝わっていたことを示す資料と言えます。

ベトナム産では青花が出土しており、首里城跡全体で見るとその出土数は100個体以上にのぼりますが、日本本土では、対馬や博多に見られる程度です。その内容は青花の碗・皿・瓶などが大半で、貯蔵用の壺などはありません。また、京の内跡で出土している花唐草文面取瓶は類例が少なく、貴重なものです。つまり、ベトナム産陶磁器はタイ産とは異なり、陶磁器自体が重宝され、琉球に運ばれてきたものと考えられます。ただ、文献上にはベトナムと琉球の交流は1509年の1度しか記録されていないにも関わらず、15世紀のベトナム産陶磁器の出土が多いことから、記録に残らない交易の存在が指摘できます。

日本産

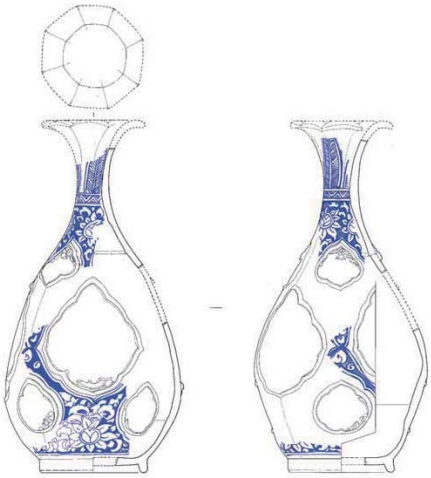
備前焼　壺

口径 17.4 cm　器高 43.0 cm　底径 23.0 cm

備前焼　擂鉢

口径 28.4 cm　器高 8.7 cm　底径 13.4 cm

ベトナム産



花唐草文面取瓶

口径 9.2 cm　器高 29.8 cm　底径 9.0 cm

コンテナとしての容器

中国やタイで生産された褐釉陶器の壺は、青磁や青花などとは別の性格を持った製品といえます。つまり、これらは陶磁器そのものが商品として輸入されたのではなく、何らかの物産を納めた「コンテナ」として二次的に運ばれたと考えられます。コンテナの内容は様々と思われますが、もっとも代表的なのは酒類でしょう。琉球の外交文書集『歴代宝案』には、タイから壺入りの「香花酒」が輸入されたとの記述が確認できます。琉球ではこの酒を海外からの賓客に振舞っており、冊封使の記録には飲酒後の感想がみられます。

また当時の文献によると、東南アジア地域の貿易ではタイで空の陶器壺を入手した後に、別の場所で中身を購入する場合もあったようです。タイ産褐釉陶器壺はシーサッチャナライ窯とメナムノイ窯の２ヶ所で主に生産されていますが、いずれの窯場でもサイズは大型（高さ 50 ～ 60㎝）・中型（45㎝前後）・小型（30㎝前後）の３種類であり、器形もラッパ状に広がる口縁と肩部に横耳を４個貼り付ける特徴的なプロポーションで統一されています。上記のエピソードはタイ産褐釉陶器壺がコンテナとして重宝されていたことを示す興味深い内容ですが、その理由の一つが高い規格性にあると考えられます。このようにして東南アジア地域の各種物産を納めたタイ産褐釉陶器壺の一部が、京の内跡出土品に相当するかもしれません。

中国産

褐釉陶器壺
口径 19.8 cm　器高 50.8 cm　底径 15.7 cm

褐釉陶器壺
口径 14.4 cm　器高 59.6 cm　底径 9.4 cm

褐釉陶器壺
口径 12.4 cm　器高 33.8 cm　底径 11.6 cm

タイ産

褐釉四耳壺
口径 21.8 cm　器高 52.2 cm　底径 24.2 cm

褐釉四耳壺
口径 19.5 cm　器高 62.0 cm　底径 27.0 cm

褐釉陶器壺
口径 11.7 cm　器高 32 cm　底径 12.0 cm

様　々　な　金　工　品

京の内跡出土品の金工品には様々なものがありますが、武器・武具、装身具、祭祀用具、生活用具、その他に分けて特徴的なものを説明します。

武器には刀剣の鍔（つば）や切羽（せっぱ）があり、武具には甲冑（かっちゅう）・鎖帷子（くさりかたびら）・兜（かぶと）などがあります。甲冑は小札（こざね）・鞐（こはぜ）・胸板などの金具の形状から、日本と同様のデザインであったようです。ただ、八双金具など飾り金具は、魚々子（ななこ）と呼ばれる鱗のような文様が日本製に比べるとややまばらであるなど独自性があることから、琉球製のものが含まれるかもしれません。特に、兜の前立飾には日本で見られない独自の大きな円文や三日月文が飾られており、太陽（テダ）の表現ではないかとも考えられています。

装身具には、簪（かんざし）や指輪が出土しています。これらは琉球では近世以降に見られるもので、現時点では15世紀以前に遡る最古のものだと思われます。

祭祀用具には、香炉・鈴・片口銚子・鏡などがあります。香炉は中国で見られる鼎（かなえ・てい）形のもので、雷文（らいもん）などの文様が飾られ、明代に作られたものと考えられています。

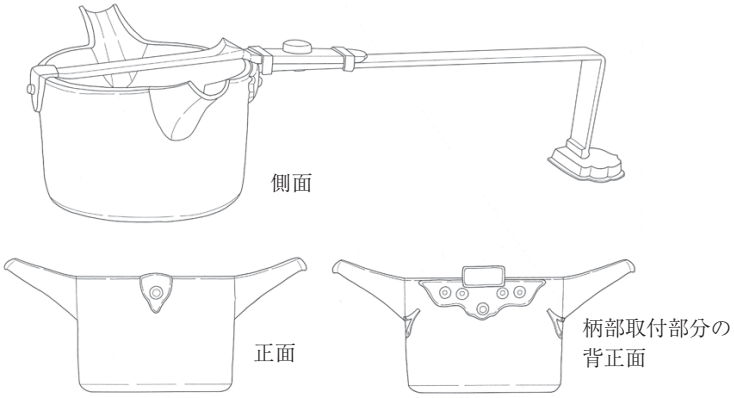
生活用具には、釘・鍋・刀子など日用品が見られます。その他、特徴的な資料として錠前や蝶番（ちょうつがい）が見られ、この場所が倉庫跡であった証拠と言えます。

上段左：鏡　　上段右：長柄付片口銚子の容器

下段左：鼎型香炉把手　　下段：香炉胴部

参考資料（出典：沖縄県教育委員会『沖縄の金工品関係資料調査報告書』）

獅子鈕鼎形香炉（日光山輪王寺：栃木県）



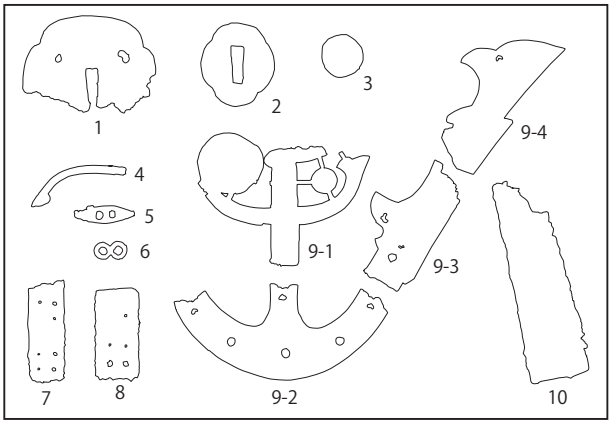
長柄付片口銚子の容器を推定復元（作図：金城亀信）

上段：蝶番（ちょうつがい）

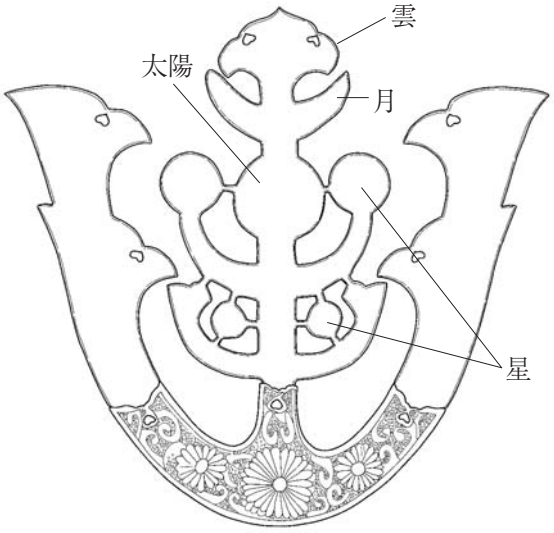
下段：錠前

上段左：鈴　　上段右：指輪

下段：簪（かんざし）



1．刀剣（鍔）　2．切羽　3．武器 銅弾
4．武具 鎧の覆輪（ふくりん）　5．武具 兜鉢の笠鞐（かさこはぜ）
6．武具 兜鉢の責鞐（せめこはぜ）　7、8．武具 小札（こざね）
9．武具 兜鉢の立物
　9－1．立物
　9－2．鍬形台（くわがただい）
　9－3，4　鍬形
10．武具兜鉢の矧板（はぎいた）



出土した立物の破片から全体像を推定復元（作図：金城亀信）

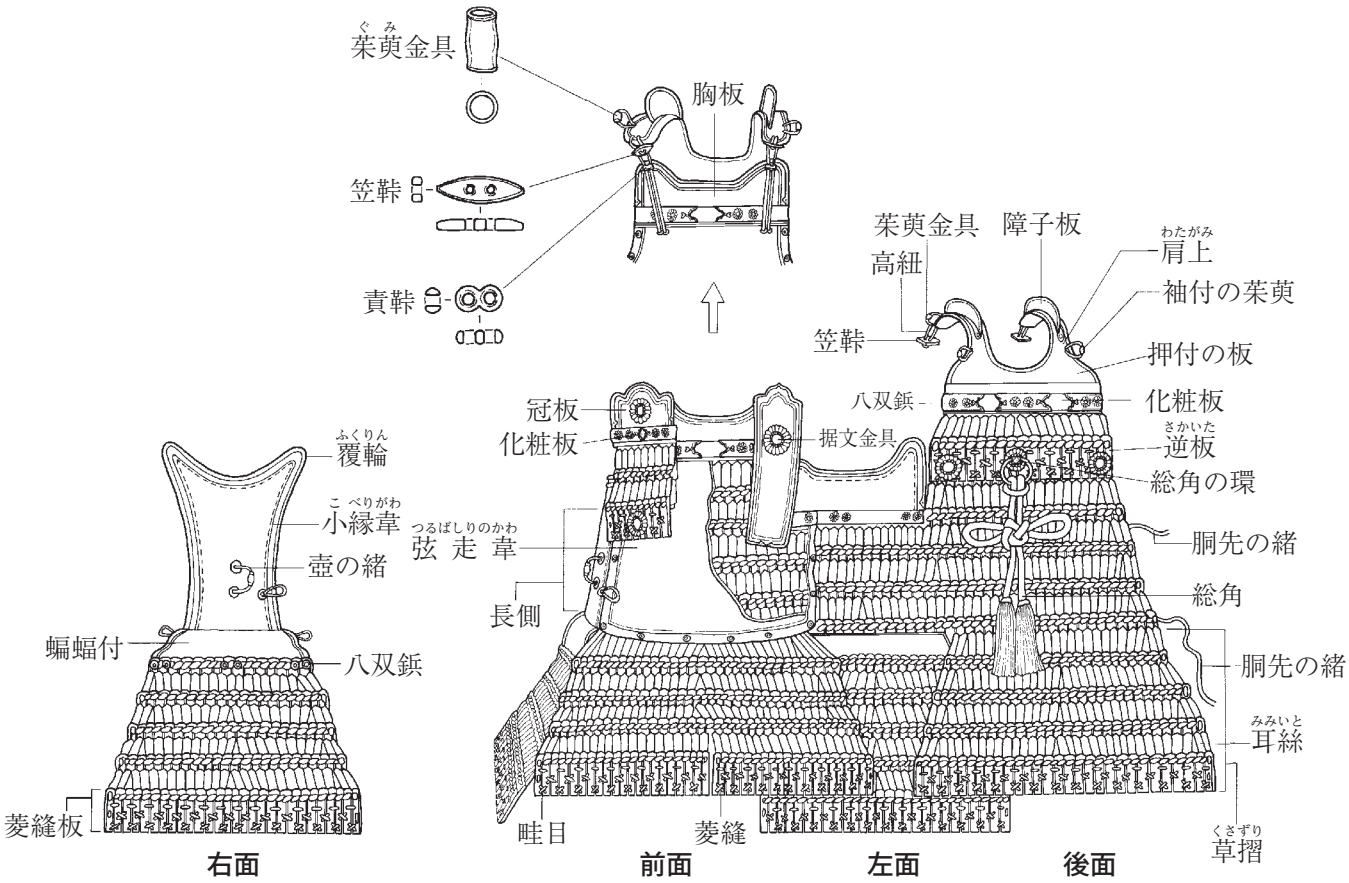
上段左：武具 八双金物（魚々子地文様）　上段右：武具 八双金物

下段：武具 八双金物（首里城北殿跡出土品）

魚々子（ななこ）とは…

先端が小さい輪状の刃になった魚々子鏨（たがね）を用いて，金属面に魚の卵のような小さな円文を連続して一面に打ち込む技法。

大鎧の各部名称（原図：金城亀信）



重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

一　土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの

二　銅鐸、銅剣、銅鉾その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

三　古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

四　宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの

五　渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○国宝及び重要文化財指定基準、・（中略）・基準（抄）(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会　告示第 2 号)〔最終改正〕平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

（考古資料の部）

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　　518 点

附　一、金属製品　　一括

附　一、ガラス玉　　一括

所　有　者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（庁保美第３の３号平成 12 年６月 27 日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文：　　尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成６～７年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順３年 (1459) に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶･磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に２点と景徳鎮窯跡出土の破片１点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」(訳文の趣旨) とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年６月号より抜粋）

※ 官報告示：平成 12 年６月 27 日付け文部省告示第 120 号

※ 文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 27 条第１項の規定により、平成 12 年６月 27 日付けで重要文化財に指定。

重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財　考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　518 点

附（つけたり）　一、金属製品　一括

附（つけたり）　一、ガラス玉　一括

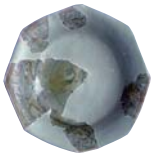
重要文化財 陶磁器内訳

種　類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁（せいじ）（289 点）	碗（わん）　103	皿（さら）　117	盤（ばん）　32
	壺（つぼ）　20	大花瓶（おおかびん）　2	馬上杯（ばじょうはい）　1
	水注（すいちゅう）　3	瓶（びん）　5	香炉（こうろ）　3
	水滴（すいてき）　1	花盆台（かぼんだい）　1	大鉢（おおばち）　1
白磁（はくじ）（33 点）	碗　14	皿　11	杯（はい）　2
	水注　1	壺　1	瓶　4
元染付（げんそめつけ）（2 点）	馬上杯　1	大合子（おおごうす）　1	
明染付（みんそめつけ）（58 点）	碗　32	皿　4	杯　3
	鉢　1	瓶　14	壺　4
色絵（いろえ）（3 点）	碗　2	皿　1	
紅釉（こうゆう）（1 点）	水注　1		
瑠璃釉（るりゆう）（2 点）	碗　1	瓶　1	
褐釉磁器（かつゆうじき）（1 点）	碗　1		
褐釉陶器（かつゆうとうき）（35 点）	壺　30	水注　1	鉢　1
	壺蓋（ふた）　1	特殊壺　1	
	蓋（ふた）　1		
白釉陶器（はくゆうとうき）（3 点）	壺　2	水注　1	
タイ産褐釉陶器（さんかつゆうとうき）（55 点）	壺　55		
タイ産半練土器（さんはんねらどき）（22 点）	蓋　18	壺　4	
ベトナム陶器（3 点）	瓶　1	水注　2	
備前ほか（本土産）（6 点）	擂鉢（すりばち）　1	甕（かめ）　3	壺　2
瓦質土器（沖縄産）（5 点）	蓋　5		
合計　518 点			

1500

明

第二尚氏 | 第一尚氏


青磁雷文帯八角皿（中国）

青磁牡丹唐草文水注（中国）

青花牡丹唐草文梅瓶（中国）

青花花唐草文面取瓶（ベトナム）

青磁双耳唐草文瓶（中国）

青磁馬上杯（中国）

青磁口折印花双魚文皿（中国）

備前焼壺（日本）

褐釉陶器四耳壺（タイ）

青磁雷文帯碗（中国）

青花松梅樹文双耳花瓶（中国）

一四二〇　尚思紹、シャムに使を遣わす
一四二一　バレンバン（インドネシア）との交渉はじまる
一四二七　龍潭を掘り安国山を築く
一四二九　尚巴志、三山統一

一四五三　志魯・布里の乱が起こり、首里城炎上
―五彩の手法が中国・民窯で盛んになる
一四五八　万国津梁の鐘鋳造
一四五九　首里城京の内倉庫が炎上
一四六三　マラッカへ使者を派遣
一四七〇　金丸（尚円）即位
〈第二尚氏王統始まる〉
一四七七　首里城歓会門、久慶門の創建
一四九〇　パタニ（タイ）と初めて交易
―この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める―
一五〇一　玉陵を築く
一五〇八　首里城北殿の創建
一五二九　首里城守礼門の創建
一五七〇　南方貿易の記録途絶える

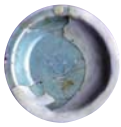
室町時代

1400　1300　1200

中国：元　南宋

琉球：察度王統　英祖王統　舜天王統

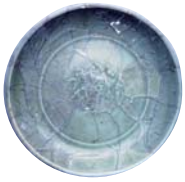
京の内の遺物


青磁口折蓮弁文皿（中国）

青磁口折蓮弁文皿（中国）

青磁牡丹唐草文大花瓶（中国）

青花牡丹唐草文壺（中国）


青磁牡丹唐草文盤（中国）

青磁吉祥字文壺（中国）

青磁蓮弁文壺（中国）

五彩菊花文碗（中国）

青花八宝文大合子（中国）

紅釉水注（中国）

青花龍文高足杯（中国）

中国・沖縄の主な流れ

六〇七　隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣

―南宋から元にかけて陶磁器の輸出がめざましくなる―

―中国江西省・景徳鎮の台頭―

―この頃、景徳鎮で青花（染付）磁器が完成する―

―この頃、景徳鎮で五彩色絵が創作される―

一三五〇　察度、浦添按司から中山王となり首里へ

一三六八　明が興る

一三七二　中山王察度、はじめて明に進貢

一三八〇　山南王承察度、明に進貢

一三八三　山北王帕尼芝、明に進貢

一三八五　明の太祖、中山・南山両王に海船贈与

一三八九　察度、朝鮮（高麗）と通好する

一三九二　閩人三六姓、渡来と伝わる

一四〇四　冊封使、はじめて来琉

シャム（タイ）船渡来し交易

一四〇六　尚巴志、武寧王を討ち父・思紹を王にたてる

〈察度王統滅亡、第一尚氏興る〉

一四一六　尚巴志、山北王攀安知を討つ

日本：南北朝時代　鎌倉時代

関　連　行　事　の　ご　案　内

首里城京の内跡出土品展関連講座

第54回文化講座

「中国産陶磁器の生産・流通・消費」

平成25年1月26日（土）

講師：金沢 陽（出光美術館）
　　：小林 仁（大阪市立東洋陶磁美術館）
　　：新垣 力（当センター）

【13：00開場　13：30開講】

【先着140名・予約不要・参加無料】

ギャラリートーク（展示品解説会）

展示会開催中の毎月第３日曜日に、当センター職員による
ギャラリートークを１日２回開催致します。

開催予定日

11/18、12/16、1/20、2/17、3/17、4/21

ギャラリートーク５分前に企画展示室前ホールに集合して下さい。

【午前の部　10：30～　午後の部　15：00～】
【 先着30名程度・予約不要・参加無料 】

国指定重要文化財公開　首里城京の内跡出土品展
発行年月日　平成 24 年（2012）11 月 3 日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098-835-8751　FAX　098-835-8754
HP　http://www-edu.pref.okinawa.jp/maizou

開催期間　平成 24 年 11 月3日（土）～平成 25 年5月5日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター